

～日本語弁論大会 下関市長賞受賞者研修旅行記～

この旅行記は、2024年6月1日に中国・青島市で開催された第22回山口銀行杯日本語弁論大会（主催：青島市人民政府外事弁公室、青島市教育局、株式会社山口銀行、後援：在青島日本国総領事館、下関市）で下関市長賞を受賞した学生が、2025年1月23日から1月26日まで下関市への研修旅行を体験し、その感想をまとめたものです。研修旅行に関する学生の体験記ならびに本市職員の同行体験記をご紹介します。

1. 忘れがたき日々ー下関の学びと絆

青島職業技術学院商務日本語科 衣 政滔（イ・セイトウ）

2024年6月、青島と下関の姉妹都市45周年という記念すべき年に開催された第22回山口銀行杯日本語スピーチコンテストで、この日、栄えある下関市長賞をいただき、憧れていた下関市への研修旅行に招待されました。

日本文化に触れる貴重な機会を通し、甲冑の重さに歴史を感じ、市長表敬で頂いた温かい言葉に勇気をもらい、まさに「百聞は一見に如かず」を体感する4日間となりました。この旅で得た全ての出会いと学びは、私の心に深く刻まれる宝物です。



2025年1月23日、青島空港から下関市職員の吉田さんと共に福岡空港へ向かいました。初めての飛行機に緊張しながらも、窓から広がる雲の海が下関への期待を膨らませました。福岡空港到着後、JRで下関市へ移動し、国際課職員の皆様の温かい出迎えを受け、旅の幕が開けました。

24日朝は長府庭園で着付けの体験を行いました。鉄製の鎧の重さに驚きつつ、鏡に映った姿は戦国武将の気分を味わわせてくれました。市長表敬の前、応接室で待っている間、バッグに大切にしまった故郷の風をどのタイミングでお渡しするべきか、そっと心の中で練習していました。市長からはふぐの記念品とTシャツをいただき、「若い世代の活躍を楽しみにしています」との激励の言葉を頂戴しました。

梅光学院大学では学生2名の案内でキャンパスツアーを体験して、ビジネス日本語の授業ではリスニング問題に挑戦し、実際のビジネス会話の難しさを痛

感じました。学内カフェで味わったサクサクのチキンカツとほろ苦い抹茶ラテは、日本の学生生活が身近に感じられた忘れられないひとときでした。続いて訪れた下関西高等学校では、生徒たちの溢れる青春のエネルギーに圧倒されました。カルタ取り体験や質問交流を通じて笑い合い、記念品の交換や写真撮影で友情の温もりを実感しました。国境を越えた若者の絆が、一瞬で深まることを学びました。



25日は郊外を巡り、川棚くすの森の苔むした小道、福德稻荷神社の赤い鳥居、角島大橋から望むエメラルドグリーンの海—下関の自然と歴史が一体となった風景に心を奪われました。一の俣温泉の露天風呂で旅の疲れを癒し、温泉から眺める山々の景色に安らぎを覚えました。

最終日の火の山展望台では、関門海峡を見下ろす絶景に息を呑みました。展望台内には青島との交流の歴史を示す記念碑や展示物が並び、45年間の両市の努力を実感しました。鮮やかな絵と語りで綴られた「ふぐ食文化の紙芝居」からは、下関の歴史と人々の誇りが伝わってきました。

下関で過ごした4日間は、私にとって「初めて」の連続でした。甲冑の重さに耐えたように、言葉の壁も一歩ずつ乗り越える覚悟が生まれました。帰路の飛行機から見た雲海は、まるで新たな可能性が広がるキャンパスのようでした。福岡空港での別れ際、吉田さんに「この経験を未来への一歩に」と声をかけられました。故郷の凧のように中日の絆が高く舞い上がる日を信じています。

この旅で得た全ての出会いと学びを、日本語の勉強に注ぎ込み、いつか両市を結ぶ「凧の糸」になりたい—そう強く思っています。

2. 下関市長賞受賞者下関研修旅行を終えて

下関市総合政策部国際課 青島市派遣職員 吉田 和矢

2024年6月に開催された山口銀行杯日本語弁論大会に、私は審査員として出席しました。出場者全員本当に素晴らしい発表でしたが、その中でもひときわ輝いていたのが、今回市長賞を受賞した衣さんでした。「ふるさとの味」をテーマに、彼の出身地である山東省濰坊市の羊肉のスープを紹介してくれました。優しい語り口、そして心温まるエピソードを聞いたとき、私は強く感銘を受けましたが、最後の結果発表の時、その学生が大学生1・2年生の部で最優

秀賞を受賞し、下関研修旅行を贈呈することとなり、大変嬉しく思ったことを今でもよく覚えています。表彰式では、原課からエアメールで送られてきた賞状と副賞の目録を私が手渡ししましたが、これが衣さんとの初めての出会いになりました。

さて、その後、具体的に旅行日程を検討するため、何度か打合せを行い、出発の日を迎えたのですが、当日になって驚きの事実を知ることとなりました。日本への旅行が初めてなのは事前に聞いていたのですが（もちろん海外旅行も初）、飛行機も初めて、そしてさらに山東省から出ることも初めて！コロナの影響もあってか、家族で中国国内を旅行する機会がなかったそうです。上記のレポートでも書いてあるように、まさに「初めて」づくしの旅となり、相当緊張していたのではないかと思います、その分、心に深く残る経験になったことでしょう。

3泊4日という短い期間でしたが、下関の魅力を存分に味わってもらえるようスケジュールを組みました。

長府庭園での甲冑や小次郎衣装の着付け体験では、最初は何を着させられるのだろうか？という不安な表情も見受けられましたが、実際に着てみると、衣さんは背が高いこともあり、とてもよく似合っていました。写真を撮るときに、どのようなポーズを取ればいいですかと質問があり、ポーズについて考えが及んでいなかった私は、はっとさせられました。どうすればかっこいいポーズになるのか、次回までの課題です。

赤間神宮、日清講和記念館、功山寺、歴史博物館等を訪れ下関の歴史を知り、川棚くすの森、角島大橋、火の山を訪れ下関の美しい自然を感じ、そして一の俣温泉に入り文化を体験しました。

また、食も重要なテーマの一つです。衣さん本人の希望もあり、刺身を食べてもらいました。生魚を食べる習慣がないので大丈夫かなと思いましたが、おいしいと言って食べてくれる姿を見て、こちらも嬉しくなりました。中国は広いので各地で味付けの好みが異なります。一般に「南は甘い、北は塩辛い、東は辛い、西は酸っぱい」と言われています。今回体験した日本食ですが、私たちが食べ慣れている味は、塩味と辛さを好む山東人にとっては甘みが強く、辛さは物足りなかったのではないかと感じます。ただ、食事を共にするうちに、どんな日本食なら山東人に好まれるか次第にわかってきたのは私にとって大きな収穫でした。

さて、本研修旅行で一番の成果は、学校訪問ができたことです。梅光学院大学と下関西高校にご協力いただき、青少年同士の交流の場を設けることができました。以前衣さんに聞きましたが、普段の大学生活では同年代の日本人に会う機会は全くないとのことだったので、今回笑顔で交流する姿を見て、私の心に響くものがありました。温かく受け入れてくださった両校の皆様はこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

アニメがきっかけで日本語に触れるようになり、大学で本格的に勉強を開始した衣さんは、将来日本に留学し、卒業後はアニメ関係の仕事に就きたいと話してくれました。下関研修旅行を通して経験したことが、これからの人生において大きな一歩を踏み出すきっかけになってくれたら幸いです。今後のご活躍を期待するとともに、また下関で再会できることを願っています！